

和子<sup>かずこ</sup>が握りめしをこしらえるとき、塩水に長く手をひたすのは、土のおいを消し去るためだ。そのせいで、和子の握りめしはしょっぱいという評判が広まっている。面と向かって言われることもあるが、そんなとき和子は決まって、きず薬で赤くなった指先を腰の後ろに隠すのだった。

濡れた手を拭かずにうろつくせいで、台所の薄い床板には水滴が散っている。ときどき足の裏がひやつとする。和子は毎日、台所に立つ。自分が食べるものは自分で用意する。農家に嫁いで五十年、汗とともに染みついた習慣だった。

ふいに、音が鳴り響いた。台所を出て、一歩ずつ踏みしめて進む。一年前、人工関節を入れた膝が、この頃また痛むようになっていた。

居間へ入ると、ちゃぶ台の上で、二つ折りの携帯電話が震えていた。濡れた手でつかんで開く。ひとさし指でボタンを強く押し、耳

に当てる。

「はいはい」

「母ちゃん、今、どこ？」

息子の武史たけしだった。

「おお」

テレビの黒い画面に、自分の姿が映っていた。六畳の居間にはサイズが大きすぎる。昨年、武史が買ってくれたものだ。

「武史か、今、家におるろお」

「今日の朝イチの船やったけど。言っとらんかった？」

「あばよお」思わず驚きの声が漏れた。「しもうた、忘れとったばって」

「おお、ほんなら、レンタカー借りて行くかうか？」

武史が強い口調で言った。耳が遠いと思っても思っているのだろうか。

「うんにゃ、武史、父さんに、差し入れを持って行かんばいけんから。港まで迎えに行くから、そのあといっしょに神社に行こうわい」

はあ、いいよ、じゃあ待つとくから。武史が言い、電話は切れた。

携帯電話を両手で閉じる。水が飛び散った。この携帯も、武史が買ってくれたものだ。苗を敷きつめたカゴよりずっと軽いはずなのに、握りしめた手が疲れていた。

「急がんば」

体を左右へ揺さぶりながら、台所へ戻った。握りめしの上を、ハエが飛んでいた。腕を振り回して追い払い、ラップをかける。冷凍庫から包みを出し、シンクに置いておく。

鳩時計がポツポと鳴った。麦茶の入ったキーパーとカゴを提げ、皿を抱え、和子はズックを履いて外へ出た。

庭の敷地はやたらと広い。もう四、五軒、家を建てられるくらいはあるだろう。島の田舎の農家で、土地だけはあった。ほとんどが田んぼか畑だ。山も持っている。「場所さえよければ土地成金だったのによお」と、武史が

以前、愚痴を漏らしていた。

地面が湿っている。滑らないように気をつけて歩く。ここは山の陰に位置するから、七月に入っても、少しひんやりしている。通り道のそばに、背の低い木が植わっている。

すすけたビニールハウスに陽射しがこもり、白く光っている。先日、島の若い男二人に頼み、ハウスに放置していた破れた土嚢を、軽トラで農協へ移動してもらった。半日分の日当を払うことになったが、手伝ってもらって助かった。和子と正ただしには重すぎて運べなかったのだ。

蔵の前に車を停めてある。鍵は差したままだ。和子はドアを開け、握りめしとカゴを助手席に積んだ。運転席に乗り込み、エンジンをかける。

人工関節を入れてしばらくしてから、買い替えた車だった。「頼むから免許を返納してくれ」なんて武史は言うが、この島で、車なしで生活できるわけがない。買い物に出るのも、

組合や銀行へ行くのも、車が必要だ。特に和子の住む山のほうは、歩ける距離に食料品を買える店がない。ゆうちよの預金を切り崩し、親戚の紹介してくれたディーラーへ行き、わざわざ中古のマニュアル車の軽を買った。ミツシヨンの運転に慣れているから、今さらオートマの車を運転するのはかえって恐ろしい。そして、古くなるまでぶつけることなく新車を購入し倒す見込みもないからもったいない、という判断である。

ハンドルを握る手が震える。甲状腺の病気があった。薬を飲んでいる。しかし、理由はそれだけではない。次はいつクラクションを鳴らされるか、考え出すと焦ってしまい、手に力が入らなくなる。もともと下手くそだ、四十を超えてから家に内緒で取ろうとしていた免許だ、そう思い、開き直って雑に運転すると、やっぱり派手にクラクションを鳴らされた。以前、親戚の葬儀に参列した時、バスの運転手が語っていた。島の運転は本土より

難しいですよ、ウインカーを点けないで曲がる車がざらにいますから。

荒れた大波のような農免道路を走った。窓を閉めていても、堆肥のにおいが鼻をついた。

道端のマリーゴールドがしおれている。島の婦人会の仲間たちが、お金を出し合って植えた花だ。目を刺すように咲いた頃、何本か、勝手に抜かれてしまった。片隅の土が、無残にも掘り返されていた。また抜かれてはいないかどうか、横目で確かめようとしたが、武史が待っていることを思い出し、スピードを上げて通り過ぎた。畑のあいだの曲がりくねる道を走った。

「母ちゃん、おおきにや」

武史が車に乗り込み、「このまま神社に行っとか？」と言う。

およ、およ、と返事をして、和子は車を出した。

港の人影はまばらだった。船の行き来する

合間の時間帯だった。ジェットフォイルの高  
速船なら、本土から一時間半。武史が朝イチ  
の船でやってくる予定を忘れていた。

後部座席でスマホをいじりながら、武史が  
言った。

「明日、本番やるが？」

「およ」

「調子はよか？」

「およ、父さんも頑張っといが」

そうか、とつぶやき、窓の外を眺める武史  
が、ルームミラーに映った。

和子は重いハンドルを切った。開いている  
のかどうかわからないほど細い目を、さらに  
細める。空は山で見るより透きとおっている。  
雲はない。潮のにおいがして落ち着かなかっ  
た。漁船の停泊所を過ぎる。

「あば、はまがみストアは潰れとらあちや」

武史が声を上げた。商店街の入口にあった  
食料品店が、シャッターを下ろしていた。「閉  
店しました」という張紙が、島の強い風にな

びいている。

「おお、知らなかったか？ コンビニになる  
つちゆうて」

「知るわけなかや。それ本当か？」

「店長さんが土地を譲ったちゆうてな。何代  
目やったか」

現在、島にはコンビニが二軒ある。オープ  
ン当初は人だかりができて、月の売上が本土  
もふくめて県内トップを記録したらしい。和  
子もおむすびを買って食べたことがある。あ  
まりおいしいとは思わなかった。山で採れる  
山菜を具にしたほうがうまい。

「まあ、コンビニのほうが便利だからな」

武史が笑った。国道から山へ続く道に入り、  
ギアを切り替える。車が唸る。上り坂を力ず  
くでのぼる。

「武史、今日は何か準備するものがあつか？」

「いや、いいよ。いつもの感じでやってくれ  
や」

武史は、本土の新聞社で働いている。大学



進学を機に島から出て、卒業して太陽光発電の仕事に就いたあと、地元の新聞社に転職した。最初は営業職をしていたらしい。「母ちゃん近所で新聞取っとらん人はおらんか？」と連絡があつたが、そんな人はいなかった。みんな、おくやみ欄を読みたいから、本土から遅れて昼すぎに届く新聞を待っている。

その後、武史は記者となつた。今は地域面を担当している。ネタを探している中で、故郷の踊りに両親が関わっていることを思い出し、取材してもいいかと連絡があつたのだ。

明日は、阿久根千代女あくねちよじよの盆踊りがある。旧暦の盆に奉納する、代々受け継がれる踊りだ。

実際にあつた出来事が元となっている。かつて島流しとなった家老が、今は和子たちの住む山へ、送られてきた。彼と恋仲にあつた女は、本土からこの島まで、丸太船に乗ってやってきた。二人は再会し、愛を確かめ合った。しかし、二人の関係がお上に伝わってしまう。切腹を言い渡された男は、女を殺し、

自分も腹を切って死んだ……。

二人の霊を供養するため、毎年、地区の住民たちは踊っている。県の無形文化財になったあとも変わらず、当たり前のように山で踊り続けていた。

「神社、久しぶりやな」

武史がつぶやく。アクセルを踏み込み、和子は言った。

「小学生の時、ラジオ体操をしとったろうが」  
「おう、夏休みな、市の打ち上げ花火があった、夜、父ちゃんも母ちゃんも見に行こうとせんから、家の中で、音だけ聞いてや。次の日の朝、友だちん衆しがみんな花火の話をしとったもんや」

晴れの日、農作業をして、日が暮れたら帰って風呂に入ってめしを食って寝る。和子は当時を思い返した。外の店へ食べに出ることはほとんどなかったし、浮ついた祭りなど連れて行ってやらなかった。贅沢はしなかったから、武史も大学に行かせることができた

のだ。一方、和子は、最低限の教育を受けたあと、すぐに嫁入りしていた。そういう時代だった。学がなければできない仕事をしている武史が羨ましかった。でも、今さらどうしようもないことだ。

神社の橙色の鳥居が見えた。隣の駐車場へ車を入れる。砂利のこすれる音が振動になって尻に伝わった。頭から突っ込んで停める。エンジンを切る。助手席のキーパーとカゴを腕に通した。降りた武史が、握りめしの皿を持った。

蝉が鳴いている。足元のかげろうと響き合い、揺れて聞こえている気がした。濃く茂った草のおいがする。

鳥居の横から境内へ入る。一步一步に、ぬるい風がまとわりつく。もうすぐ蚊がいちばん飛ぶ時期だ。和子の好きな季節だった。

「お、おった。おったけりゃ」

武史が顎でしゃくるほうに、男たちが集まっていた。賽銭箱の下の石段や、植え込みの

縁に腰かけ、何やら話している。作業着かジヤージ姿が、十人ほどだ。

距離があると、顔を見分けるのが難しい。和子は右手を挙げた。あの薄い色の作業着だろう、と見当をつけ、男たちのもとへ歩いていった。

「おう、武史じゃ。久しぶりやな」

ようやく顔が判別できた声の主は、踊りを取りまとめる会長だった。その隣に、和子の夫の正がいた。何を言うでもなく、笑うかわりに、口をぽかんと開けていた。

「どうも皆さん、ご無沙汰しております」

武史が頭を下げると、一同が笑った。

「船は揺れたか？」

「しつかり新聞に書いてくれや」

「熱中症、ならんごとせえな」

皆、武史の幼い頃を知っている人たちだ。

武史も、「殿上の、いい写真も撮らせてもらいますから」とおどけている。

石段に座る男たちのあいだに、和子は皿を

置いた。

「おっ、今日も握りめしじゃ」

「しよっぱか、しよっぱか」

「それがうまかけりゃあ、なあ」

「動いたあとは、塩っ気けを入れんば」

口ぐちに言いながら、男たちは握りめしをつかんだ。正も手を伸ばし、「たいそかなあ」と言った。

「今のは新聞に書いてわかるかい」

会長が武史に向かって笑う。

「たいそか、とは、疲れた、という意味です。

そう解説せんばな。俺の仕事や」

武史は笑い、「茶もあるから、飲んでくれや」と続けた。和子は、キーパーとプラスチックのコップを、皿の横に置いた。

「おおきになあ」

男の一人が麦茶を注ぎ、正に差し出した。

正が黙って受け取ろうとする。その様子を見た武史が声をかける。「すまんな、園田そのだのおじさん、気つこうてもろうて」横からコップを

奪い、正に渡す。

「武史、よか、よか。正さんはたいそか」

遠慮するな、といった素ぶり、園田は首を振った。

「すみません」和子が他のコップに麦茶を注ぎ、配って回る。「武史、父さんは、日陰におらせてくれや」

武史は不安げな表情で、正に座るよう促した。正は植え込みの縁にもたれた。

「足手まといやなっか？」

父親について、何の気なしに言ったのである。武史の一言を、和子は聞き逃さなかった。何か言い返そうと思ったが、先に会長が口を挟んだ。

「うんにゃ。正さんが、いちばん上手かよ」

和子はほっとして息を吐く。コップを握りしめる。

「そうか？」

まだ半笑いで聞き返す武史に、会長が続ける。

「およ、若いん衆はみんな、正さんの真似をするんだから。正さんを手本にせえって、いつも言っとるが」

「へえ、知らなかった」

「プロよ、プロ。明日、わかるが」

園田が前歯のない口を大きく開けて笑った。会長も、他の男たちも笑った。武史もつられて笑った。和子もうなずきながら、茶を飲み干した。

いつもの話だ。踊りがいちばん上手いのは、和子の夫の正。普段は無口だが、踊りで雄弁に語る男を、誰もが尊敬している。その話を踊りの参加者たちから聞くたびに、和子は、この山に認められているように思った。土と、風と、草木と、生活する人たちと、つながっている、そう感じるようになってから、和子は正たちの踊りの応援にますます力を入れている。そんなふうの流れていく春から夏は、何度めぐっても過ぎやすい季節だった。

蝉が少し騒がしくなった。そろそろ解散だ。

踊りの前日でも、やることはある。農家がやるべきことなんて、探せばいくらでもある。最近の正は、かなりきつそうに、米袋を持ち上げている。

「あば」

キーパーの中身が空になっていた。

「あばよお、もうなくなっとったけりや」

あばよお、は、驚いたときに言う島の方言だ。昔、島から離陸する飛行機が激しく揺れた時、あばよお、あばよおと島民が繰り返すのを聞いた東京の人は、この世に「あばよ」と別れを告げていると勘違いし、その覚悟に感心したそうだ。以前、武史が新聞のコラムに書き、笑い話にしていた。

「暑かったからな。そら、なくなったもんにや」

男たちは握りめしをたいらげ、麦茶を飲んだ。和子は腰の後ろで手を組み、笑っていた。

木の影が揺れている。汗が空へ抜けていく。人工関節を入れた膝は、九十度より鋭く曲が



りはしない。でも、風に吹かれていれば、まっすぐ地面に立てる。言葉にするのは難しいが、和子は間違いなく、風を感じていた。

「昼間から豪勢やな」

武史が言い、鶏肉と椎茸の煮しめに箸を伸ばす。落花生の豆腐、海苔のお汁、自家消費の白飯が、ちゃぶ台に並んでいる。

「典型的な山の食事じゃらあちや」

真ん中のボウルにも、塩茹でした落花生が盛ってある。収穫したばかりのものを、近所の人に分けてもらった。和子はお礼にきゅうりをあげた。

「武史、これも食えや」

和子は、箸で大皿を押した。つわぶきの煮物。武史は「いや……」と首を振った。

「あば、つわは好かんかったか？」

和子は小袋を破り、かつお節をつわぶきにふりかけた。

「どうも苦くてな。このつわ、採ってきたや

つやろうが」

「およ」

つわぶきは、島のそこらへんに生えている。春先、和子が山から引っこ抜いてきた。冷凍庫に保存してあったものを、神社へ行く前、解凍しておいたのだ。

「母ちゃんに限らず、田舎はやりたい放題やな」

「我がで食うだけならよかばって、無人販売に出す人もおるっちゅうろ」

「なんちゅうあこぎな商売や」

テレビではバラエティ番組が流れていた。どこまで内容を理解しているのかわからないが、正も熱心に見つめていた。和子は白飯をくちやくちや噛みながら言った。

「所ジョージはこの頃、ようテレビに出とるけりや」

「所さんはずっと第一線で出てるだろ」

すかさず武史が言い、茶を啜る。正が落花生を割り、豆を口へ放った。殻をちやぶ台の

上に置く。向かいに座っていた和子はそれを拾い、ざるの中に捨てた。

「おい、父ちゃん、殻くらい自分で捨てえや」  
正に向かって、武史がたしなめるように言った。正は「ん……」と口ごもり、うつむいている。

「武史、よかよか。よかとや」

「なんでもかんでも、ばきいが世話してくれ  
ると思うたら違ちごうろ」

「うんにゃ」ばきい、つまり妻である、和子が言い返す。「殻くらい捨ててやらんば。ばきいは何のためにおる？」

「何のためや？」

「殿上の世話をするためや」

和子は気の抜けた笑い声を上げた。その殿上である正は、黙って座っていた。武史は呆れた表情で吐き捨てた。

「あんなあ母ちゃん、今の時代、そんなことみんなの前で言うたら、大目玉やろ。すぐ叩かるいろ」

和子もわかってはいるつもりだった。テレビを見ていても、男女平等とか、女性の活躍などと、よく聞かれるようになった。ときどき玄関先に置いてある市議会議員のビラにも、似たような内容が書いてある。この島で女性の議員さんが立候補するなど、昔ならとても考えられなかった。

今は、女性が家のことをするべきなどと、口が裂けても言えない時代なのだろう。和子だって、武史が家では家族の洗濯物を干しているのを知って、なぜ旦那に家事をやらせるのかと思ったことがある。それでも口にはしなかった。自分が古く、取り残されるだけなら、それも山に生きる女のさだめだろう。

あまり仲が良いとは言えない、むしろいみ合っていた正の母親から、いつかの誕生日に立派な木のしゃもじを贈られた時は、嬉しかったものだ。家を、山を、預けられた気として目頭が熱くなった。その喜びをおおっぴらに言いふらすのは許されなかった。しかし、

農家の嫁として静かに尽くした人生は恥ではなかった。当たり前のことを持続けた誇りがあつた。そんなことを言えばまた、武史は怒るだろう。わかっていたから何も言わなかった。

傷の目立つ指先を押しつけ、ちやぶ台の上に散らばつた落花生の殻の屑を集めていく。武史がため息をつき、茶を一口飲んだ。

昼食を終え、正は畑に出た。和子は、お中元でもらつたフルーツゼリーをお盆に載せ、台所を出た。

「まんまん様さまに、あげんばな」

神棚は家のいちばん奥にある。歩くと畳が鳴つた。ここで葬儀を行う際は、ふすまを外してひと続きの畳の間にするだろう。昔ながらの平家だ。二人で住むには広すぎた。ときどき、天井のきしむ音が聞こえた。黴の生えた木のおいがした。

電灯の紐を引っ張る。神棚に置いてある和菓子菓子の横に、ゼリーゼリーを供えた。

二回、礼をする。二回、手を打つ。

明日、晴れますように。踊りがうまくいきますように。怪我をしませんように。

何を祈っても違う。和子はそう思っただけで目を開けた。普段は心の内で祈りの言葉を唱えたりしないのに。言葉にだまされている気がした。明日が本番だからなのか。それは毎年同じではないか。武史がいるからだろうか。武史が元気でありますように。こんなときにも息子の幸せを願っていた。

庭の木の葉にこもる蝉の声につられるように、蛍光灯がじりじり鳴っていた。古い家が呼吸し、また、和子の呼吸を断ち切ろうとしているようだった。正のことを思った。日に日に力の入らなくなる手を合わせた。

礼をし、振り返ると、武史が立っていた。

「あば」

「ああ、すまん母ちゃん。めし食う前にするの、忘れとったや」

およ、と和子は後ずさり、武史に場所を譲

った。

武史はマッチをこする。蝋燭に火を灯し、そこへ線香を近づける。煙ののぼる線香を差し、武史は手を合わせた。和子は口を押さえ、くしゃみをした。

「あれ、サルスベリじゃあな？」

礼をして振り返った武史の視線の先に、庭があつた。窓ガラスのすぐそばに濃く茂る、軒下に生えた雑草が庭へと続き、木を取り囲んでいた。

「そうじゃろお」

和子は答え、サルスベリの木を眺めた。つるつるした肌が陽射しを照り返していた。小鳥が鳴きながら枝から飛び立った。

「手入れせんばな」

武史がしみじみと言った。

正もしんどいのだ、と和子は思う。庭に気を配る余裕がない。武史が幼い頃は、庭でよく遊んだものだった。サルスベリの乾いた木肌を手のひらで叩き、名前の由来を話してい

た。木登りの上手な猿もすべって登れなくらい、つるつるしとらあちゃあ、そいじやからサルスベリって言うことや……武史はおぼえているだろうか。

庭そのものは息絶えることがなかった。夏が終わって秋に移り、冬がおとずれても、また次の春を生きる。いつまでも若い。何度も生まれなおす。

「このへんにバスを走らせようか、つちゅう話もあるごたる」

隣で武史が言った。口をきつく結んだ横顔を、和子は見つめた。武史が続ける。

「新聞社のほうで話をしよった。老人ばっかして、運転も大変やし、デイサービスなんかも人が足りん、ちゅうてや。市のほうでお金を出して、閉まってもうた幼稚園のバスを買い取って走らせたらどうかと」

武史は目を細めた。バス、確かに便利だろう、と和子は思った。朝と夕方だけでいい、町へ連れて行ってくれたら助かる。



「どわんかなあ？」

庭をぼーっと見たまま首を傾げる武史の横で、和子は思った。幼稚園の小さなバスに乗り降りできるだろうか。膝をかばいながら。そもそも、気の難しい年寄りがそんなバスに乗るだろうか。島の住民はみんな、気性が穏やかだと思っているのか。

年老いても、この山で家を守り、生活すること。やがて一人で息をひきとること。覚悟が必要だった。本土へ出てしまった武史には、その覚悟がないだろう。もともと本土に住んでいる人なら、なおのことだ。

「よかなあ。便利になるが」

嘘でも口にするると、怒りは消えた。いちいち腹を立ててもしょうがない。流されない。五十年で学んだ生きる術のひとつだ。自分は年をとった、と和子はあらためて思った。それでまたひとつ、長生きできる気がした。

「まあ、まだ計画の段階やばってな」

そう言い残し、武史は居間のほうへと戻つ

ていった。

和子の頭の中には、明日の踊りと、これからの稲刈りのことだけが残った。

すがすがしかった。広い家でひとり、和子は田んぼに立っていた。苗を運ぶとき、水を撒くとき、体に力が広がり、当たり前前に腹がすく心地よさは、まだまだ捨てられない。偉い人や若者は、うわべだけしか見ていないのだろう。それでは米など作れない。

和子はもう一度神棚に目を向け、頭を下げて台所へ向かった。床に水滴を飛び散らせながら、食器を洗った。

風呂から上がり、障子戸を開けた武史に、

「武史、ちょっと来てみれ」

正が声をかけた。立ち上がり、居間を出ていく。

「あ？」と生返事をして、武史は後について行った。何だろう、と和子も思い、後ろから歩いていく。

真っ暗な家の中、天井裏で音がした。ねずみだ。ここに棲みついている。以前、電話が繋がらなくなったとき業者に調べてもらったら、彼らが電話線を噛みちぎっていたこともあった。

神棚の手前にある押入れのふすまを、正は開けた。奥を探り、両手のひらに収まるくらいの黒い箱を取り出した。

ああ、あれか、と和子は思った。正が「見てみれ」と言って蓋を開く。

「父ちゃん、これなら前にも見たが」

武史が覗きこむ箱の中には、勲章があった。薄汚れた白と赤のリボンの先に、真鍮でかたちづくられた花がついている。正の祖父がもらったものだ。たまに押入れから引っ張り出して眺めたり、武史に見せたりしている。

「家宝じゃ」

正がかすれた声で言った。武史は「何回も見たよ」とため息をつく。インターネットで値段を調べたら千五百円くらいで売りに出さ

れていたと、和子は聞いたことがある。たいしたものじゃない、と武史は笑っていたが、気を遣って黙っているのだろう。

「家宝を、武史も大事にせえや」

「わかったから」

武史がうなずき、手持ちぶさたな様子でうろろした。正は手の中の勲章を見つめている。

戦時中、空襲が激しくなった時期、正は本土へ出ている。島での戦闘の激化を危ぶみ、本土の北にある米どころへ学童疎開することになったのだ。正はそのとき、初めて島を出た。着いた先で、地元の子どもたちの前に並ばされた時、正は姉の破れた服の裾をつかんで涙ぐんだという。その姉から和子が聞いた話だ。

「もう、たいそか」

うつむいた正の声を、和子は聞き逃さなかった。

「もう踊りもやめるか」

「今年までじゃな」

武史が振り向き、「そうなの？」と目を見開いた。

疎開先は米どころとは言え、食料の供給は不足しており、正たちは腹を空かせていたらしい。上級生に弁当を奪われたり、イナゴを食べたりしていた。つわぶきこそないものの、ワラビやタケノコなんかで飢えをしのいだらう。

「そうじゃ、それがよかな」

和子は正に微笑みかけた。

戦争が終わり、島へ戻ってからも、疎開先との交流は続いていた。島の集落の子どもたちは、本土へソテツを送った。南国のずぶとい木だ。

その木がまだ枯れずに残っているらしいと聞いた武史が、数年前、正と和子を連れて、当時の疎開先へ連れて行ってくれたことがある。

澄んだ空の低く広がる冬の日だった。田ん

ぼや畑のあいだを車で進んだ。歩く人のいない町を抜け、小学校へたどり着いた。山なみの映える、小ぢんまりとした校庭に、ソテツは植えられていた。

普段はおとなしい正が、感極まって飛びつき、木にふれて涙を流したのを、和子はよくおぼえている。

「こんな寒いところでも、ソテツが育ったもんにゃ」

和子は涙をこらえながら、武史に「ありがとうなあ」と言うのが精一杯だった。

居間で扇風機が回っている。羽の音と、首を振る音が、しんとした夜に響いている。

「なんとかなったもんにゃ」

和子は誰にもなく言った。

「踊りの記事は、そのへんの事情も絡めて書かんばな」

武史は呑気な口調で言ったが、正が突っ立ったままにいるからどうしていいかわからなくなっただのか、

「はよ寝れや」

と言って居間へ戻ってしまった。

「寝ようわい」

和子も言った。きず薬の塗られた指を、正の腰に当てた。およ、と返事をして、正は勲章の箱を押入れにしまった。

外から月明かりが差していた。廊下の隅を、蜘蛛が一匹、這っていった。

静かな踊りだ。皆、そう表現する。盆踊りと言えば、地域の人間が一体となって楽しく盛り上げるものも多いが、この地区の、阿久根千代女の踊りは違う。ちゃんと供養しとかんば、死んだ人に死んでいてもらうのが盆踊りじゃあ、和子はそう思う。

鳴り物が、神社の境内に響いた。正たちが列をなし、渦を描くように歩いている。

和子の隣で、武史はカメラをかまえている。Tシャツの胸のポケットに、細い機械が挿さっている。ボイスレコーダーだ、と先ほど教

えてもらった。

千代女さんも、ごおらしなあ。

和子はそう口にしたあと、録音されているだろうか、と思った。ごおらし、で伝わるだろうか。かわいそうだ、という意味だ。武史は、本土の言葉に変えてしまうのか。

空はまだ明るく、正の姿がかろうじて判別できた。じりじりと動く白装束がまぶしい。ひぐらしがひっそりと鳴いている境内に、太鼓と鈴の音が続く。

武史がシャッターを切る。何事かつぶやき、カメラを下ろす。神妙な顔つきだ。額に汗が浮かんでいる。

輪から外れて立っていた歌い手の男たちが、声をそろえて歌い出した。家老と千代女の物語を歌っていた。幾度となく聞いてきた話だが、この夏はなぜか、新鮮に聞こえた。正の踊りもこれで終わりかもしれないと思うと、和子の頬が熱くなった。

正たちは輪になったまま、手を上げ、足を



踏み、リズムよく進む。会長も、園田も、笠をかぶっていて、顔はわからない。

どうして正の姿を見分けることができるのか、と和子は不思議に思った。何十年といっしよに田んぼに立ち、畑を耕し、山道を歩いてきたからだろうか。いや、踊りがいちばんうまいからだと思いなおす。

確かに、父さんがいちばんうまかな。

武史がぼそりとつぶやいた。和子もうなずいた。

誰にでも、ひとつくらいは、人より上手なことがあったもんにゃ。

声になったかどうかは和子にもわからなかったが、思いは確かに心からあふれていた。

正の身振り、手振り。足さばき。次へ移る身のこなし。どれもがはつきりと目に映る。

薄暗い空間に白装束がぴたりと止まる。輪郭から何かがただよい、夜へ流れている。

長年、農作業をしていたからだろうか、と和子は思う。筋肉の使い方が、踊りでも生か

されている。果たしてそんなことがあるだろうか。

どこか寂しげな太鼓に合わせて、歌の中の千代女は海を渡っていた。家老に会うため、船を漕いでいた。武史が歯を食いしばり、シヤッターを切る。

和子は島とは別の場所に住んだことがなかった。膝の手術などの用事で本土へ行く機会があったが、生まれてからずっと、島で生活していた。きっと死ぬまでそうだろう。誰かを求めて海を渡りはしないだろう。

正と初めて会った日を思い出す。お互い、照れてほとんど話ができず、ただ親戚に勧められるがままに結婚した。そうするしかなかった。それでよかった。何かを言える時代ではなかった。

でも、島に、山に、生きてきたのは、私がそうしかかったからだ。それは正も同じはずだった。

和子は立ったまま、頭を垂れ、唇を噛んだ。

嬉しいような悲しいような、今まで味わったことのない気持ちだった。武史の手が、その肩に添えられた。

なしかあかな、涙が出そうになってくいや。

正たちは、踊らされているのではない。忘れられまいと踊っている。和子はそれを見逃すまいと、顔を上げて見つめた。男たちが中央へ集まり、暗い空を静かに見つめている。いつのまにか日が暮れそうだ。

踊らなければ、男と女の魂が、いや、私たちの生活が、この山へ置き去りにされてしまう。私たちもあの世へ引っ張られてしまう。正たちは、老いた体をさらけ出して踊っている。日に日に力の入らなくなる手で、和子も拍子を打つ。この小さな集落から、山へ、海へ、島から本土へ、まだ見たことのない場所へ、音が響きわたるような気がした。終わってしまった踊りが空気を揺らし、いま立っている地面も揺らしているようだった。

家には土間がある。叩き土で固めてある地面に、靴だけでなく、ザルやカゴ、スコップ、肥料の袋などが置いてある。

「武史、靴をふめや」

和子が、靴を履く、というのを方言でそう言うと、昔の武史は実際に靴を踏みつけて笑い、言うことを聞かなかったものだ。

「母ちゃん、つわは、まだあつか？」

土間に座り込んだ武史が振り返って言った。

「あ？」

和子は口を開く。

「つわは好かんかったと違ごうか？」

「うんにゃ」武史は目を伏せて言った。「もういっぺん、食うてみらんばと思うてや」

なんだか意味ありげな言い方をするので、和子は不思議に思ったが、つわなら大量に余っている。食べたいなら食べたらいい。

「およ、たいてえ、余つとる。持っていけや」

台所へ行って冷凍庫を開けた。飲食店の厨房で使うような、大きな冷凍庫だ。

「この冷凍庫、新しくなったとやろお。雷が落ちて壊れてな」

「買い換えたとか？」

和子はずわの袋をいくつか取り出し、新聞紙にくるむ。

「農協の保険に入ってたからや、保険金で新しいの買うたら、八万円プラスじゃった。かえって得したが」

「そんなうまい話があるかよ」

袋に入れて渡した。武史は小脇に抱え、「俺も歳をとったもんにゃ」とつぶやいた。

「何を言おうかい。まだ若いが」

和子も座り、ズックを履いた。高さのある土間は、人工関節で曲がりにくい膝に助かる。昔の山の人間も同じだろうか。膝や腰を痛めても出入りや作業に支障が出ないように、作ってあるのかもしれない。

武史が、ははっと笑った。

「つわがうまか、と思う歳になってもうだが。毎日コンビニの弁当じゃ味気なかばって、つ

わでも弁当に入れて持っていきこうかい」

「あばよお」

和子も笑い、武史の腰を叩いた。

「本当にあばよおじゃ」

武史は照れくさそうに立ち上がり、庭へ出た。

庭のビニールハウスのそばの畑に、麦わら帽子をかぶった正が立っていた。シャベルを持っている。踊りで疲れただろうに、と和子は思った。

「父ちゃん、帰るから」

武史が呼ぶと、正は振り返り、帽子を脱いだ。

「おお、気いつけえや」

またシャベルを握りしめ、土に視線を向けた。それだけか、と和子は少しがっかりしたが、この父と子はいつもこうだと思い直し、歩き出した武史の後を追った。

車に乗り込み、農免道路を走る。晴れが続いている。来週あたり、強い雨が降り、梅雨

は終わるだろう。そこから一気に暑くなる。

「よか記事になりそうか？」

和子は助手席の武史に聞いてみた。

「ああ、おかげさんでな。おおきにや」

「父さんも喜んだはずや。武史が来てくれて、新聞にも残してくれて」

風に吹かれた草の切れ端が、フロントガラスにぶつかった。この島の風は回っている。海から山へ、また海へ、回って吹いている。

和子は傷だらけの指でハンドルを握った。

「気をつけて運転せんばな」

隣で武史が諭すように言った。和子はふいに心細くなり、「そうじゃった」と声を上げた。

「このへんに、サルスベリの挿し木をしたとや。マリーゴールドを抜く人がおったからな。まだ生えとるやろうか」

減速し、花の集まる一角のそばに、車を停めた。色あせたオレンジの花が、ぽつぽつと咲いている。

「サルスベリなんか、挿し木する人も、そう

そう抜く人もおらんが。生えとつたもんじゃ」  
シートにもたれて武史は言ったが、和子は  
車を降り、舗装の粗いアスファルトに立った。  
腰をかがめ、短い雑草を抜いて放る。枯れた  
花の花びらを撫でてやる。掘り返された部分  
の土は、ならされたまま、何も植えられてい  
ない。

「あつたか？」

武史が窓を開けて言った。車は通らない。  
陽射しを受けて乾いた土のにおいがする。

「うんにゃ」

和子は首を振り、狭い花畑のそばを歩いた。  
植わっていないはずのサルスベリを、和子は  
探した。あたりは田畑で埋めつくされている。  
稲がすつと伸びている。昨日の正の足さばき  
を思い出し、一步、一步と、膝をやわらかく  
使って歩きながら、和子は山を眺めた。ここ  
に広がる黄金の地面を超えると、海が見える。  
空を伝って汽笛が聞こえる。港のほうから音  
が流れてくる。

(了)